

ごん狐

新美南吉

青空文庫

これは、わたし私が小さいときに、村の茂平もへいというおじいさんからきいたお話です。

むかしは、私たちの村のちかくの、なかやま中山というところに小さなお城があつて、中山さまというおとのさまが、おられたそうです。

その中山から、少しはなれた山の中に、「ぎつねごん狐」という狐がいました。ごんは、ひとり一人ぼっちの小狐で、しだの一ぱいしげった森の中に穴をほって住んでいました。そして、夜でも昼でも、あ

たりの村へ出てきて、いたずらばかりしました。はたけへ入って
 芋をほりちらしたり、菜種なたねがらの、ほしてあるのへ火をつけたり、
 ひやくしひやくしようやようや
 百姓家の裏手につるしてあるとんがらしをむしりとって、い
 ったり、いろんなことをしました。

あるあき
 或秋のことでした。二、三日雨がふりつづいたその間あいだ、ごんは、
 外へも出られなくて穴の中にしやがんでいました。

雨があがると、ごんは、ほつとして穴からはい出ました。空は
 からつと晴れていて、百舌鳥もずの声がきんきん、ひびいていました。

ごんは、村の小川おがわの堤つつみまで出て来ました。あたりの、すすきの
 穂には、まだ雨のしずくが光っていました。川は、いつもは水が
すくな
 少いのですが、三日もの雨で、水が、どっとましていました。た

だのときは水につかることのない、川べりのすすきや、萩はぎの株が、黄いろくにごった水に横だおしになつて、もまれていきます。ごんは川かわ下しもの方へと、ぬかるみみちを歩いていきました。

ふと見ると、川の中に人がいて、何かやっています。ごんは、見つからないように、そうつと草の深いところへ歩きよつて、そこからじつとのぞいてみました。

「兵ひょうじゅう 十じゅう だな」と、ごんは思いました。兵十はぼろぼろの黒いきものをまくし上げて、腰のところまで水にひたりながら、魚をとる、はりきりという、網をゆすぶつていました。はちまきをした顔の横つちように、まるい萩の葉が一まい、大きな黒子ほくろみたい
にへばりついていました。

しばらくすると、兵十は、はりきり網の一ばんうしろの、袋のようになつたところを、水の中からもちあげました。その中には、芝の根や、草の葉や、くさつた木ぎれなどが、ごちやごちやはいつていましたが、でもところどころ、白いものがきらきら光つています。それは、ふというなぎの腹や、大きなきすの腹でした。兵十は、びくの中へ、そのうなぎやきすを、ごみと一しよにぶちこみました。そして、また、袋の口をしばつて、水の中へ入れました。

兵十はそれから、びくをもつて川から上りあがびくを土手どてにおいて、何をさがしにか、川かわ上かみの方へかけていきました。

兵十がいなくなると、ごんは、ぴよいと草の中からとび出して、

びくのそばへかけつけました。ちよいと、いたずらがしたくなつたのです。ごんはびくの中の魚をつかみ出しては、はりきり網のかかっているところより下手しもての川の中を目がけて、ぽんぽんなげこみました。どの魚も、「とぼん」と音を立てながら、にごつた水の中へもぐりこみました。

一ばんしまいに、太いうなぎをつかみにかかりましたが、何しろぬるぬるとすべりぬけるので、手ではつかめません。ごんはじれつたくなつて、頭をびくの中につつこんで、うなぎの頭を口にくわえました。うなぎは、キュツと言ってごんの首へまきつきましました。そのとたんに兵十が、向うから、

「うわアぬすと狐め」と、どなりたてました。ごんは、びっくり

してとびあがりました。うなぎをふりすててにげようと思いました
 が、うなぎは、ごんの首にまきついたままはなれません。ごんは
 そのまま横つとびにとび出して一しようけんめいに、にげていき
 ました。

ほら穴の近くの、はんの木の下でふりかえって見ましたが、兵
 十は追っかけては来ませんでした。

ごんは、ほっとして、うなぎの頭をかみくだき、やつとはずし
 て穴のそとの、草の葉の上のせておきました。

十日ほどたつて、ごんが、弥助やすけというお百姓の家の裏を通りかかりますと、そのの、いちじくの木のかげで、弥助の家内かないが、おはぐろをつけていました。鍛冶屋かじやの新兵衛しんべえの家うちのうらを通ると、新兵衛の家内が髪をすいていました。ごんは、

「ふふん、村に何かあるんだな」と、思いました。

「何なんだろう、秋祭かな。祭なら、太鼓や笛の音がしそうなものだ。それに第一、お宮にのぼりが立つはずだが」

こんなことを考えながらやって来ますと、いつの間まにか、表に赤い井戸のある、兵十の家の前へ来ました。その小さな、こわれかけた家の中には、大勢おおぜいの人があつまっていました。よそいきの着物を着て、腰こしに手拭てぬぐいをさげたりした女たちが、表のかまど

で火をたいています。大きな鍋なべの中では、何かぐずぐず煮えていました。

「ああ、葬式だ」と、ごんは思いました。

「兵十の家のだれが死んだんだろう」

お午ひるがすぎると、ごんは、村の墓地へ行つて、六地蔵ろくじぞうさんの

かげにかくれていました。いいお天気で、遠く向うには、お城の

屋根瓦やねがわらが光っています。墓地には、ひがん花ばなが、赤い布きれのよう

にさきつづいていました。と、村の方から、カーン、カーン、と、

鐘かねが鳴つて来ました。葬式の出る合図あいずです。

やがて、白い着物を着た葬列のものたちがやって来るのがちら

ちら見えはじめました。話はなし声こゑも近くなりました。葬列は墓地

へはいつて来ました。人々が通ったあとには、ひがん花が、ふみおられていました。

ごんはのびあがつて見ました。兵十が、白いかみしもをつけて、位牌いはいをささげています。いつもは、赤いさつま芋いもみたいな元氣のいい顔が、きようは何だかしおれていました。

「ははん、死んだのは兵十のおつ母かあだ」

ごんはそう思いながら、頭をひっこめました。

その晩、ごんは、穴の中で考えました。

「兵十のおつ母は、床とこについていて、うなぎが食べたいと言ったにちがいない。それで兵十がはりきり網をもち出したんだ。ところが、わしがいたずらをして、うなぎをとって来てしまった。だ

から兵十は、おつ母にうなぎを食べさせることができなかつた。そのままおつ母は、死んじやつたにちがいない。ああ、うなぎが食べたい、うなぎが食べたいとおもいながら、死んだんだろう。ちよツ、あんないたずらをしなけりやよかつた。」

三

兵十が、赤い井戸のところ、麦をといでいました。

兵十は今まで、おつ母と二人ふたりきりで、貧しいくらしをしていた

もので、おつ母が死んでしまつては、もう一人ぼっちでした。

「おれと同じ一人ぼっちの兵十か」

こちらの物置ものおきの後うしろから見ていたごんは、そう思いました。

ごんは物置のそばをはなれて、向うへいきかけますと、どこかで、いわしを売る声がします。

「いわしのやすうりだあい。いきのいいいわしだあい」

ごんは、その、いせいのいい声のする方へ走っていきました。

と、弥助やすけのおかみさんが、裏戸口から、

「いわしをおくれ。」と言いました。いわしうり売は、いわしのかごをつんだ車を、道ばたにおいて、ぴかぴか光るいわしを両手でつかんで、弥助の家の中へもってはいました。ごんはそのすきまに、かごの中から、五、六ぴきのいわしをつかみ出して、もと来た方へかけだしました。そして、兵十の家の裏口から、家の中へ

いわしを投げこんで、穴へ向^{むか}つてかけもどりました。途中の坂の上でふりかえつて見ますと、兵十がまだ、井戸のところまで麦をといでいるのが小さく見えました。

ごんは、うなぎのつぐないに、まず一つ、いいことをしたと思いました。

つぎの日には、ごんは山で栗^{くり}をどつさりひろつて、それをかかえて、兵十の家へいきました。裏口からのぞいて見ますと、兵十は、午^{ひるめし}飯^{めし}をたべかけて、茶^{ちやわん}椀^{わん}をもったまま、ぼんやりと考えこんでいました。へんなことには兵十の頬^{ほっ}ぺたに、かすり傷がついています。どうしたんだらうと、ごんが思っていますと、兵十がひとりごとをいいました。

「一たいだれが、いわしなんかをおれの家へほうりこんでいったんだろう。おかげでおれは、盗人ぬすびとと思われて、いわし屋のやつに、ひどい目にあわされた」と、ぶつぶつ言っています。

ごんは、これはしまったと思いました。かわいそうに兵十は、いわし屋にぶんなぐられて、あんな傷までつけられたのか。

ごんはこうおもいながら、そつと物置の方へまわってその入口に、栗をおいてかえりました。

つぎの日も、そのつぎの日もごんは、栗をひろっては、兵十の家へもって来てやりました。そのつぎの日には、栗ばかりでなく、まつたけも二、三ぼんもつていきました。

四

月のいい晩でした。ごんは、ぶらぶらあそびに出かけました。中山さまのお城の下を通ってすこしいくと、細い道の向うから、だれか来るようです。話声が聞えます。チンチロリン、チンチロリンと松虫が鳴いています。

ごんは、道の片がわにかくれて、じつとしていました。話声はだんだん近くなりました。それは、兵十と加助かすけというお百姓でした。

「そうそう、なあ加助」と、兵十がいました。

「ああん？」

「おれあ、このごろ、とてもふしぎなことがあるんだ」

「何が？」

「おつ母が死んでからは、だれだか知らんが、おれに栗やまつたけなんかを、まいにちまいにちくれるんだよ」

「ふうん、だれが？」

「それがわからんのだよ。おれの知らんうちに、おいていくんだ」
ごんは、ふたりのあとをつけていきました。

「ほんとかい？」

「ほんとだとも。うそと思うなら、あした見こに来いよ。その栗を見せてやるよ」

「へえ、へんなこともあるもんだなア」

それなり、二人はだまって歩いていきました。

加助がひよいと、後を見ました。うしろごんはびくつとして、小さく

なつてたちどまりました。加助は、ごんには気がつかないで、そ

のままさつさとあるきました。吉兵衛きちべえというお百姓の家まで来る

と、二人はそこへはいつていきました。ポンポンポンと木もくぎ

魚よの音がしています。窓の障子しょうじにあかりがさしていて、大き

な坊主頭ぼうずあたまがうつつて動いていました。ごんは、

「おねんぶつがあるんだな」と思いながら井戸のそばにしやがん

でいました。しばらくすると、また三人ほど、人がつれだつて吉

兵衛の家へはいつていきました。お経を読む声がきこえて来まし

た。

五

ごんは、おねんぶつがすむまで、井戸のそばにしやがんでいました。兵十と加助は、また一しよにかえつていきます。ごんは、二人の話をきこうと思つて、ついていきました。兵十の影法師かげぼうしをふみふみいきました。

お城の前まで来たとき、加助が言い出しました。

「きつきの話は、きつと、そりやあ、神さまのしわざだぞ」「えっ？」と、兵十はびつくりして、加助の顔を見ました。

「おれは、あれからずっと考えていたが、どうも、そりや、人間

じゃない、神さままだ、神さまが、お前がたつた一人になったのをあわれに思わっしやつて、いろんなものをめぐんで下さるんだよ」

「そうかなあ」

「そうだとも。だから、まいにち神さまにお礼を言うがいいよ」
「うん」

ごんは、へえ、こいつはつまらないなと思いました。おれが、栗や松たけを持って行ってやるのに、そのおれにはお礼をいわないで、神さまにお礼をいうんじゃないやア、おれは、引き合わないなあ。

六

そのあくる日もごんは、栗をもって、兵十の家へ出かけました。兵十は物置で縄なわをなっていました。それでごんは家の裏口から、こつそり中へはいりました。

そのとき兵十は、ふと顔をあげました。と狐が家の中へはいったではありませんか。こないだうなぎをぬすみやがったあのごん狐めが、またいたずらをしに来たな。

「ようし。」

兵十は立ちあがって、納屋なやにかけてある火縄銃ひなわじゆうをとって、火薬をつめました。

そして足音をしのばせてちかよって、今戸口を出ようとすると、ごんを、ドンと、うちました。ごんは、ばたりとたおれました。兵

十はかけよつて来ました。家の中を見ると、土間どまに栗が、かためておいてあるのが目につきました。

「おや」と兵十は、びつくりしてごんに目を落しました。

「ごん、お前まいだったのか。いつも栗をくれたのは」

ごんは、ぐつたりと目をつぶったまま、うなずきました。

兵十は火縄銃をばたりと、とり落しました。青い煙が、まだ筒つ口ぐちから細く出ていました。

青空文庫情報

底本：「新美南吉童話集」岩波文庫、岩波書店

1996（平成8）年7月16日発行第1刷

1997（平成9）年7月15日発行第2刷

初出：「赤い鳥 復刊第三巻第一号」

1932（昭和7）年1月号

※入力時に使われた底本が不明とのことなので、表記は岩波文庫版に合わせた。

入力：林裕司

校正：浜野智

1998年10月23日公開

2012年5月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ごん狐

新美南吉

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>